



新潟の水辺だより

Vol.37

●編集発行・新潟の水辺を考える会 ●発行日・1996年5月27日 Vol.37

TOPICS

通船川の報告書ができました！

■通船川の報告書ができました。

昨年4月から1年間に渡り、(社)北陸建設弘済会の「北陸の地域活性化に関する研究助成」を頂き、『市民参加による身近な水辺回廊の再生手法の研究—都市河川回廊・通船川を事例として—』を行ってきました。その活動に関する報告書ができました。4月6～7日、相楽、森本、高橋、星島、浅井、進、大崎、杉山で新潟市東地区公民館にまるまる缶詰めになって編集作業を行いました。通船川ネットワークの皆様のお陰を持ちまして、やっとのことで200ページにも渡る報告書を提出することができました。ありがとうございました。

報告書の内容は下記のとおりです。

●はじめに：『ゆっくりと時間をかけた対話』を！：大熊孝

◆第1章 活動ドキュメント

●活動一覧表：梶 瑤子、「水辺だより」から：高橋 正良

◆第2章 通船川の現況

2-1.通船川の歴史の変遷 時代的変遷：水内邦夫、通船川地震災害復興：高橋良穂

2-2.通船川の自然 通船川の植物：石沢進、笹原 治、川瀬 詠子、通船川の鳥類：高橋 正良、杉山 泰彦、通船川の魚たち：井上 信夫、通船川の水生昆虫・トンボ：石月 升、佐藤 祥子、通船川の景観：佐々木 専、通船川の水質：水内 邦夫、通船川の社会環境：水内 邦夫、佐々木 専

◆第3章 再生活動

3-1.通船川の再生活動

通船川ルネッサンス21：星島卓美、浅井敬一、地域住民活動の紹介：星島 卓美、浅井 敬一

3-2.公民館活動：大崎信子

3-3.東山の下小学校の取り組み：星島 卓

美、浅井敬一

3-4.ジャーナリズムの関わり：高橋 正良、鶴間 尚、砂沢 薫子／参考；新潟高校新聞記事

3-5.事例研究取材

栃木：梶 瑤子、富山：戸枝 邦子、小阿賀野川船下り：大崎 信子、新津川ウォッチング：加藤 修

3-6.通船川ルネッサンスシンポジウム：森本 利

3-7.パートナーシップの模索／学校、自治会、企業、行政との関わり、河川行政担当者との意見交換：相楽 治

◆第4章 通船川再生への提言

1.提言集：梶、大崎、星島、浅井、井上、石月、高橋、笹原、大熊、石月、相楽、進、杉山、上山、丸山、水内、佐々木、例／自然環境の再生／河川景観の再生／川との関わり再生／通船川再生の夢

●まとめ

“つなぎ”空間再生としての視点で、都市河川とは／市民参加の到達点とパートナーシップの可能性：相楽 治

しかし、都市河川の再生、通船川をテーマとした活動はこの報告書ができたからと言って終りではありません。言ってみれば、通船川をこれから考えていくうえでの基礎資料がやっと出そろったという段階です。また、市民活動の記録をし続けることの大切さもこの報告書は訴えていると思います。(敬称略)

■ラジオジャックか・・・

すでにご存じの方もいらっしゃるかと思いますが、この4月から1年間当会でラジオ番組の制作のお手伝いをするようになりました。番組名は「96耳より情報『水辺に遊ぶ、水辺の環境』」です。BSNラジオで毎週水曜日午後5時50分より約5

分の枠で放送されます。

担当は山中 景子アナウンサーで、毎回、フィールドで会員に水辺をテーマにインタビューするという内容です。

これまでの放送は以下の通りです。

4月3日川に対する関心が克水→自然型へ(大熊 孝)、4月10日そこで生まれた「新潟の水辺を考える会」について、4月17日「川をウォッチング」とは？新津川ウォッチングの例(杉山 泰彦)、4月24日これらは公民館活動一環だが…(梶 瑤子)、5月1日もとはといえば通船川から(星島 卓美)、5月8日通船川の運動の経過 輪を広げるには(星島 卓美)、5月15日都市河川の再生について(相楽 治) 今後は川の楽しみ、カヌーの話、生物の話などが続きます。是非、これだけは紹介したい、これだけは言いたいという方がいらしたら山中アナウンサーへご一報をお願いします。(電話 025-230-1523、Fax 025-230-1550 BSN新潟放送 報道制作局 ラジオ製作部まで) 夕方でなかなか忙しい時間とは思いますが、皆さんラジオに耳を傾けてみてはいかががでしょうか？



収録中の梶瑤子さん(左) 山中景子アナウンサー(4月15日新津川にて)

杉山 泰彦

学ばべきことと、そうでないこと 国際水辺環境フォーラムinスイスに参加して

■水が通る高速道路

10月15日から15日間表記のフォーラムに参加し、川づくりにかかわる技術者、研究者、行政担当者等と意見を交わし、スイス、ドイツの川づくりの実態の一部にふれてきた。

このフォーラムを通して強い印象を受けのは、近自然型川づくりにかける関係者の情熱と、これを支える行政の姿勢についてである。

例えば、治水上完璧に近い流路工で、しかも良好な河川景観をかもしだしている流路を水生昆虫や魚類の生息環境の創出という、それだけの（と言っても良い）理由で横工や護岸を撤去して二次改修する。

例えば、交通対策上の理由からバイパスを新設し、村の中心を通る旧道が不要（生活道路としても本当に不要なのだろうか！）になったので、そこを利用して小川の復活を行う。

例えば、同じ河道でありながら、保全対象の軽重によって計画高水流量を変える（低い堤防からの越水によって少数の住民が被災すると、高い堤防に守られた多数の住民が被害額の一部を負担する制度？のようだが、まだその事例は無いと言う）。

例えば、川と並行して走る高速道路を、出水時の洪水吐水路として使う。（当然交通止めとなる）

例えば、幅数十cmの水路を数十m復活させるのに、建築、下水道、景観、生態学、植物学などの学者・専門家と市民が議論を重ねて設計する。（建築デザイナーの意見が強すぎて、この水路は失敗作だったなどと河川の専門家が嘆くようなこともある）

これらは、一部の例にすぎないが、日本でこれらの事例の一つでも実現できるだろうかと考えたとき、ヨーロッパ（ドイツ語圏）における川づくりの深淵をかいま見る思いがした。

■「船頭小唄」が生まれにくい川

このフォーラムの参加に当たって、私は一つのテーマを設定していた。それは、日本で「近ヨーロッパ型川づくり」がやられると、管理面で行きづまるのではなからうか。日本とヨーロッパの河川環境の違いを見極めた日本型川づくりが必要ではないか。ということであり、その決定的な違いの一つに植生構造があると考え、そのことを確認したかったのである。

現場にでかけると、大半の時間を植物の写真撮影と記録にあてた。

木本の方は苦手なので四国から参加した森本氏に任せ、私は得意（注）の草本をもっぱら調べた。

（注）一人でやる草本の同定には自信がある。大型のマメグンバイナズナ（グンバイナズナだったかも）があれば「オオマメグンバイナズナ」などと命名し誰からも異論はでない。知らないものは無かった事にすれば良い。

私のメモ帳には、（注）レベルで調べた50種ほどの草本名が記されている。

日本の河川敷と比べると極めて貧相で、どこか違うのである。そして、ついに大発見をする事となったのである。

「ヨーロッパの川（勿論、私が見た範囲）にはススキとイタドリとヨモギがない」というのが大発見の内容である。正確には植物園でススキ、高速道路の中分で貧弱なイタドリ河川敷でヨモギらしきもの各一株を見ているので、植生調査報告としては落第であるが…。「おれは河原の枯れススキ・・・」哀感に満ちた「船頭小唄」は日本の川のもので、ヨーロッパの川からは生まれてくる基礎的な条件がないのである。



目を皿にして観察したがススキとイタドリは発見できなかった。かくして、ヨーロッパの川と日本の川の決定的な相違点に、ススキとイタドリとヨモギの有無が挙げられると確信するに至ったのである。つまり、植生の遷移速度が日本に比べてヨーロッパでは非常にゆっくりとしており、種の構成も単調なのである。水生植物もヨシ、オランダガラシの外はミクリ、エビモ、コカナダモなどがわずかに認められた程度である。

植生構造が単純だということは、依存する動物相に当然反映する。

地元の生物屋さん（コンサル）が、200m/sクラスの河道1kmを調査した結果では、マス、シマドジョウ、トビゲラ、モロアライガイ等の水生動物（魚類と底生動物）が26種だと報告していた。こ

れは、日本の同規模（水質を含む）の河川と比べると相当貧相だといわなければならない。

あちらこちらで河床の石をひっくり返してみたが、ヒルやミズムシなどがわずかに認められたに過ぎなかった。

■深く考えた川づくりを

ヨーロッパの川で多様な生物の生息環境をつくりだすためには、水質の条件が同一であると仮定して、日本のそれとは比較にならない努力が必要で、このような不利な条件が逆に、近自然河川工法のさまざまな技術の開発につながったという側面もあろう。

例えば、トンボの生息環境を創出するためにごく浅い水域をつくったとすると、まもなく藻類や湿性植物が侵入し、さらにガマやマコモが生えてきて、やがてヨシの群落に覆いつくされる。こういう状態になると特定の種（例えばモノサシトンボ）を除いては生息が困難になるので、除草などによって遷移を抑制するという管理が必要になってくる。これが日本の水域の一般的なパターンである。

ヨーロッパの水域では、トンボのための植生環境を早く整えるためには、人工的な植栽が必要となり、安定的な環境を作り出すまでにはかなりの時間を費やすことになるが、遷移速度が遅いから管理の頻度が低く、労力もかからないということになる。

この違いが、実は非常に重要なのである。日本では、だれの責任（もちろん費用負担も含めて）で事後の管理を行うかが不明確なまま、多自然型川づくりがやられていると思われる事例が目立つからである。

河川空間に豊かな生態系を創出するためには、生物群集の生産者の地位をしめる光合成植物の多様性確保が不可欠である。

しかし、川は洪水防御という基本的な機能をもつ公物であり、植生の導入も自然林の創出と同次元で考えることはできないし、特定動物の保全という立場からも必ず抑制的な管理が伴ってくることを忘れてはならない。

多自然型川づくりは、このような管理を見据えた計画段階からの議論と、それに基づく長期的な展望に裏打ちされたものとして実施される必要があるだろう。それがないまま、多孔質護岸をつくり、やたらに木や草を植え付けても、「ごみの溜まり場」という河川空間を創出する結果となることは、早くも少なくない事例が証明していることに意を注ぐべきであろう。

河川審議会の答申でいう「地域と川の関係の再構築」に多自然型川づくりの神髄があるという思いがしてならない。



水辺で見つけたマダラヤンマ。時季が遅かったこともあるが、水辺の昆虫相は概して貧相である。

■川のダイナミズムという考え方

川の営力によって川をつくらせるという考え方があり、実際に多くのヨーロッパの河川で実施されている。

飛行機がシベリア上空を通る時、おびただしい数の自然河川の蛇行を見た。ヘアピンカーブが連続したと思うと、左右同形の曲線が離合して途中で完全な円弧を描いたり、半月湖が規則正しく連続したり、まさに千変万化の造形を写真とスケッチで記録してきた。

川のダイナミズムをシベリア大陸で実感した空の旅でもあった。

川のダイナミズムを生かした川づくりに異論をはさむつもりはない。しかし、考えてみると日本の河川改修事業の歴史、いや、国土開発の歴史は川のダイナミズムとのたたかひの歴史であったのである。

流れの多様性をつくるために、流心を山脚にぶつける。当然の結果として洪水時には山が崩れ、立木が河道内に倒れる。

「この山は氷河期から安定した地形を保っているのだから、これ以上崩れる心配は無いし、崩れても大した値打のある山ではない。倒れた木はカワセミのとまり木や魚の隠れ家となる」というのがおおよその説明の要旨である。

十数mの高水敷に不透水制を上向きに設ける。当然の結果として洪水時に高水敷にワンドができる。堤防の本体が心配で冷や汗ものである。

「これ以上洗掘は進みません。したがって、堤防に危険はありません」

「根拠は？」

「長年の経験から得た結論です」

以上が現場における設計担当技師と当方の会話の要旨である。実に大胆で、おおらかである。掘り込み河道が一般的なヨーロッパの河川と日本の河川の違いに由来するものであろうが、直輸入しないほうがよい、いや、してはならない川づくりの手法であらう。

次号へつづく 石月 升

白根の子どもビデオ

「白根市立白根小学校6年2組から水辺の会宛にビデオと手紙が送られてきました。以下に手紙を紹介します。ビデオは会にありますので、見たい方は会まで連絡下さい。

■日一日と春の訪れを感じる今日このごろですが、皆様方には益々ご検証のこととお喜び申し上げます。

さて、今回送付させていただいたものは、子どもたちが制作したVTRです。

今年度、学級では、環境の関わる活動を継続して取り組んできました。鮭の卵のふ化と飼育、そして、放流を通して、自分達の身近な生活環境の実態を見つめ、自分達が環境に対してできることを考え、行動してきました。その活動のまとめとして、自分達のやってきたことをいろいろなところに伝え、環境保全についてのPRをしたいという思いを子どもたちはもちました。そのひとつが今回のVTRです。

また、送付先も、子どもたちが環境に関する本を調べて、先進的なことをやっているところを選んだものです。

今回の実践的内容やVTRとも、稚拙な内容ですが、子どもたちの思いをおくみいただいて、何かの折に紹介して頂ければ幸いです。また、感想なども寄せて頂ければ、子どもたちも喜ぶかと思えます。

一方的なお願いで恐縮ですが、ご協力よろしく申し上げます。

〒950-12新潟県白根市大字白根1407
白根市立白根小学校6年2組担任 佐藤 由栄
Phone 025-372-3145 Fax 025-372-3147

■初めまして、私たちは、新潟県白根市立白根小学校6年2組児童一同です。

私たちは、今までいろいろな環境保護活動をしてきました。たとえばゴミ拾いや、鮭の放流、探せばたくさんあります。

その中でも私たちが一番力を入れて来たことは、今やっている環境問題をテーマにした授業です。この授業では、これ以上地球を汚さないために自分たちで、出来る事はないかみんなで

考えました。その結果でたのが、インターネットでより多くの人たちに私たちのやっていることを紹介して一人でも多くの人にやってもらおうと考えました。それでは私たちのやってきた事についてご紹介します。

■「鮭の放流」

今から約1年前私たちのクラスに500個のサケの卵がやってきました。

その卵を孵化させ、川にかえそうというのです。正直いって、とても心配でした。もしかすると、全部死んでしまうのではないかと、不安があったからです。



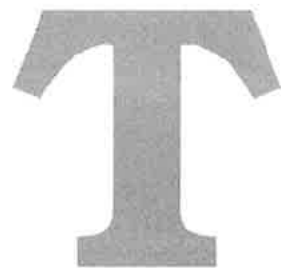
白根小学校鮭放流VTR

しかし、そんな不安をよそに、500個の卵は全部かえてくれました。

このサケの放流をとうして学んだことは、だれだって「サケ」も一人では生きていけないということでした。

だから、環境保護活動も少数の人だけでなく、もっと多くの人に行ってもらうために、みな様の資料と私たちの資料を使って、私たちでも、環境保護の呼びかけをしたいと考えています。一人でも多くの地球の人が自分たちの住む地球を大切にするために、お手数ではありますが、環境保護ボランティアの資料の提供をお願いします。

ビデオも見てください。



新津川ウォッチングと蒲原塾について

3月24日快晴の中、午前9時40分頃新津市能代分流域記念公園を出発し、会員でもある新津土木事務所田辺敏夫さん（現新潟県土木部公園緑地室）に案内してもらい、新津川の現状と都市型河川として整備した部分を見学しました。また、今回の参加者は通船川ネットワークと蒲原塾の塾生を中心に、小学生から幅広い年齢層で約70名の参加でした。

まず、能代川が大洪水をもたらした事、新津川として『市民の憩える川』を目指し整備中である事等の紹介があり、途中には鳥や水性植物そして昆虫について参加者の中から質問が出たりして、皆の自然に対する関心が非常に高い事がうかがえました。

また、都市型河川として整備した部分については、通船川ネットワークの人達が非常に興味を持ち、市民の手で管理をしている事、市街地の真中に気軽に憩える場所がある事等に、通船川も是非こうしたい等の声が聞かれました。

ウォッチング終了後、持参した“おいしいおにぎり”や豚汁を食べながら、当日の感想を語り合ったりして、大変有意義な一日でした。



新津川について説明をする田辺敏夫さん

また、7月に開局して3年目を迎える『FM新津 (76.1MHz)』の生放送に2度も実況中継をするなど、今回のウォッチングの興奮を近隣の市町村の人達にも伝える事ができました。

次に、蒲原塾について紹介します。
新津のまちづくりについて、新津市に

関連する各界各層の人達で組織するもので、毎月第四日曜日朝粥を食べて朝7時から例会を開いています。内容としては、大学教授や元関取そしてオランダから新津に来てる人等の話を聞いたり、少ない会費をやりくりして蒲原塾主催の講演会やインドのマニプリ舞踊、そして阿賀野川-小阿賀野川-信濃川を船で下りながら自然を学ぶ『母と子のわんぱくアドベンチャー』等を開催したりしています。



体験学習中

ここでは、昨年8月26日（参加小学生他100名）に実施した川下りの様子を紹介します。まず、B&G新津海洋センターでビデオを観賞し、阿賀野川の変遷と水害の歴史等を学んだ後、阿賀野川工事事務所満願寺出張所や満願寺閘門の施設を見学しました。その後砂利船2隻で、阿賀野川-小阿賀野川-信濃川を船で下る行程でした。船の上では、講義を受けたり、川にまつわるクイズに答えたり、川の水をくみ上げ、自分達の生活難排水がいかにかに川を汚す原因になるかを、実験を通して勉強するなどいろいろ楽しみました。

最後に、蒲原塾と新潟の水辺を考える会の両者が、これからも腕を組んで参加活動することにより、より良い自然環境への提言ができると思います。

石井 哲也
(蒲原塾)

水辺の建築景観その1

■水辺の建築景観の視点を探す

『詩や歌、絵画』で楽しめる川としたいという視点には河口港水都新潟市の歴史的な風土、文化性の視点、都市の中心部にある空間的な広がりを持つ視点、川のもたらす回遊性や回廊性の視点、川本来の生物的やすらぎや癒し性の視点、治水や漁業を含む利水から求められる機能的視点など川側からの見方がある。

一方、都市側の見方として背後地の土地利用としての居住、産業、交通、防災、健康福祉、教育、交流からの視点がある。



ユニゾンセンター

やすらぎという情緒的個人的なものから花火や花見などの伝統的社会文化的なもの、商業サービスの収益性を追及するもの、利用規制や誘導という機能性安全性に問するものまで幅広い。さらに、子供、老人、女性、住み人、旅人等の立場の見方など水辺の景観には多様な見方がある。



ジョイボリス・セガ

具体的な建物景観には、水辺を意識したマンション群、ユニゾンセンター、ジョイボリスセガ、ホテル、キンピールパブ、ラシントンカフェレストラン、音楽ホール、病院、テレビ局群、結婚式場ビップ、これからできるセントラルパークなど数多い。

会員や友人の意見にはそれらの建築のあり様に左右多様な意見がある。都市河川シリーズの中に水辺の景観のあり方として意見を交わしていきたい。是非、投稿を！！

相楽 治

都市河川シリーズ

3.14やすらぎ堤懇談会その1レポート

■右岸やすらぎ堤に求められるものは？

雪解け水が川を走る三月、環境NGOの集い、やすらぎ堤懇談会、新潟市の環境計画懇談会と続けて参加。やすらぎ堤懇談会は学識者と沿川企業や漁協と市民団体、デザイン学校の学生、県市行政を加えた中で屋形舟からの現地視察を入れて開かれた。

信濃川右岸には、かねてから左岸やすらぎ堤について関心のある市民にとって、「また右岸にも同じものを造るのかなあ？」という思いがあるはず！？そこで、会の世話人方々からの意見をまとめて提出した。が、初めての会議であったためか意見をかわす議論まで進まなかった。次回には是非、集約的な意見交換のできるワークショップの手法で議論を進めることを事務局に期待したい。

市民参加の議論は公開／参加／パートナーシップ（対等な立場）が原則的に必要。水辺の会が参加することで間接的には果たしているが、それだけでは不十分であり、現地での検討会などできるだけ公開討論の場を確保したい。

ちなみに、スイスでは住宅などの建築時、40日前にその形を丸太で示し景観の変化に対し隣地の了解を取ることが義務づけられている。

そこで、我がやすらぎ堤にもその手法を提案した。

幾つか、意見を総括すると多様な意見がでた。信濃川のアイデンティティ（存在証明）としての水面＝川幅200mの確保、生物空間としての川、都市的親水空間＝都市のやすらぎとは何か？川に近づき川辺を移動する空間とそのため最小の環境条件、川辺の建築景観（写真参照）、河川で出来ることと出来ないこと、河川行政と都市行政、事業の裁量と事業PRのあり方、川の教育的存在など。通船川再生研究で見られたように、護岸の造り方、使い方、使い道が都市河川では多様であることから造り方や使い方に限定せず、「市民の」使い道としての川と信濃川本来のあり様とを議論すべきなのかもしれない。

その上で、具体的な護岸の造り方は市民を交えた現地の実物大レベルでの議論に期待してはどうだろうか？

川を汚すのも楽しく使うのも市民である。造ったものの使い方を議論することより先に、造る意味、造り方、使い道を議論する中で「我まのちの大いなる川信濃川とその川辺の姿」が見えてくるのでは？と思う。少なくとも「詩や歌、絵画」で楽しめる川にしたい。

第2回懇談会は6月14日

相楽 治

亀田郷で休耕田を利用した 「ほたる牧場」づくり

5月の水田、それは茶褐色の陸地が延々と続く湖へと変身をとげる私の一番好きな季節の到来である。やがてこれが夏には緑のじゅうたんでおおわれる。どのようななりっぱな公園にも負けない風景です。

この美しい水田地帯に異変が起きている。宅地化により風景が一変し、本来水生生物が豊であったはずの水田地帯ではメダカやカエル、どじょう、ほたる等を目にすることが極めて少なくなってきました。これは稲作に効率化を求めるあまり、管理が進み過ぎ、自然との共生のバランスが崩れてしまったためであり、農業やコンクリート3面張りの水路がその原因である。



ほたる牧場ただ今建設中

私達はこれら地域にとって貴重な財産である水田を未来に受け継いでいくものと考え、水生生物が豊かであった本来の姿に戻そうと考えています。休耕田を借り受け、虫を始めとする様々な生物の共存できる水辺環境づくりを行っています。

地域住民に呼び掛け虫の学習会を開き、休耕田で住民の手でスコップを持ち水辺環境づくりを行った。今後は虫探検隊を組織し在来種である虫の（平家虫の幼虫や小魚を探し休耕田に移し変える予定です。夏にはここで育てた枝豆をゆで虫感賞会を予定しています。

地域住民の手によるこれらの小さな活動が広がり、人と生物の共生できる農業環境づくりにつながってくればと希望を持っています。

上山 寛

(建築家、ディスカバー亀田実行委員会事務局)

「特に水鳥の生息地として国際的に 重要な湿地に関する条約」?

これは、他でもないラムサール条約の正式名称です。皆さんも御存知の様に、新潟市の佐潟が、この3月にラムサール条約の登録地となりました。それを受けて、新潟市でこの冬にシンポジウムを開催しませんかという働きかけがラムサールセンター(NGO)から、新潟の水辺を考える会にあり、当会を中心としてこれから準備を進めて行くことになりました。会員の方々には、これからもシンポに向けた情報を会報等を通じてお知らせしていく予定です。

1993年3月の「水辺だより」に、〈ラムサール条約の大きな誤解〉として、少し文章を載せたことがあるのですが、ここでもう1回簡単におさらいをしておきたいと思います。

その1.

このラムサール条約の正式名称はあんなですが、ここで言う「湿地」は、水のある環境全てをさしています。ここでは河川や水田も湿地です。

その2.

水鳥はシンボルに過ぎません。確かに水鳥の価値は重要視されてますが、魚でも、植物でも、動物でも、その他湿地としての価値を認められれば登録されます。

その3.

ラムサール条約には拘束力はなく、実際に登録地になっても規制はされません。義務としては、登録地の保全を進めるための管理計画をたて、モニタリングを行い、変化のある場合は事務局に報告することとされています。

その4.

ラムサール条約は人間の利用を妨げる条約ではありません。条約の基本原則には「賢明な利用(Wise Use)」がうたわれており、湿地を上手に利用し、湿地と共存していくという持続的な利用を意味しています。「生活の発展」と「生態系の維持」の両方を成立させるシステムをつくりあげることがラムサール条約は目指しています。

八木 栄子

(ラムサール・シンポジウム新潟事務局)

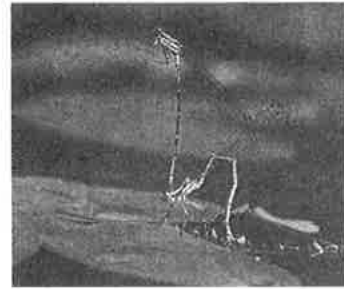
アマゴイルリトンボ

初めて出会ったのは、もう日が暮れかかった夏のことだった。残照に映えるルリ色の鮮やかさは今も目に焼き付いている。

学名に付けられたechigoanaは我が越後で、アマゴイは「雨乞池」(地元ではマオイケなどと呼ぶ)である。

新潟、山形、福島だけにしか記録されていない希産種で、新潟県の地名が付された唯一のトンボである。

澄みきった水辺に限られた種だと思っていたら白河ダム湖(山形)付近の、かなり汚れた水溜まりにもいて驚いた。



我が新潟の誇るべきトンボを宝石のように大事に守っていかねばと思う。

石月 升

奥只見のイヌワシをまもるシンポジウム



カンパのためのシール

イヌワシを最初に見たのは18年前、北岳の山頂直下、縦走の途中だった。目の前を悠々と飛んでいくその鳥の大きさと後ろ頭から背中にかけてある金色の輝きに見入ってしまった。重い荷物に疲れていた私は、カメラを取り出すのも忘れて見とれていた。それ以来、野鳥にのめり込んでいった私は、15年間イヌワシと出会うことはなかった。

次に訪れた幸運は、五十嵐川上流の笠堀ダムの湖畔にある双眼鏡で対岸の岩に休むカモシカを見ていたときだった。双眼鏡の視野に、いきなり翼にはっきりと白し線を持った大きな黒い鳥が入り込んできた。それをハヤブサが追いかけて入り込んできた。比べるとハヤブサがスズメのように見20秒くらいだったが、20倍の大型双眼鏡ではっきりとイヌワシの幼鳥と識別できた。

その後、鳥仲間の佐藤 吟一君の案内で、早春の内ノ倉ダム遠くの間並みの上をソアリ

ング(気流を利用して回転しながら上昇する)している個体を見た。

数えてみても実際に確実に識別できる状態でイヌワシと出会ったのは、自然の状態ではこの3回しかない。いかに希少な鳥であるか、これだけ鳥を見ている私でさえ、(といっても普段は平野部ばかりを見ているので)3回しか見ていない、これくらい珍しいので今回は写真は掲載できないのだ。悔しい。

1996年4月21日新潟市の駅南で開催されたシンポジウムでは、映画の上映や研究者の貴重なデータが公開されたり、未知の鳥イヌワシに関して関心が深まった。欲を言えばもっとこの鳥の情報が聞きたかった、というのが本音である。周辺環境が人間の手で直接ダメージを受けている以上、早急な手が打たれないと第2の朱鷺となるのは時間の問題だ。



シンポジウムの様子

高橋 正良

会員紹介

MEMBER'S



浅井敬一
・史緒・浩如



水辺の会の旅行などの行く先々で親子で鬼ごっこなんかしてたわむれていたため、大熊先生によって「これは家族ではない。」と断定されてしまった、あわれな似非親子でございます。実は勉強熱心な者たちですので宜しくお願いします。

写真は宮沢賢治ゆかりの北上川「休みの海岸」のほとりで



木原 四郎



九州佐賀の生まれ。新潟に来て19年目になり、すっかり根をおろしました。私にとって水辺は子供の頃から遊び場でした。泥んこになってころげ回り、叱られて佇み、恋人と語らい……。新潟の水辺ではどんな遊びをしようかな。



美寺 寿人



子供3人の父親で県職員となって15年。(動)リパークフロント整備センターへ2年間出向し、多自然型川づくりを研究し、今春、新潟に戻ってきました。

去年は、ヴェネズエラの原始の川を見てきました。機会があれば紹介したいと思います。



水内 邦夫



去年は卒業研究を進めるのに当って、大変御世話になりました。4月からは社会人となり、地域社会の活動へ積極的に参加しようと思い、入会しました。活動を通して、様々な人と出会えることを楽しみにしています。



山田 淑子



昨秋、富山市の松川、いたち川を訪ねての旅に参加した折に入会しました。阿賀の川のほとりに生まれ、四季折々の水辺の風景に接し、夏はよい遊び場として父と船で川下りした思い出も懐かしい。水辺は子供を育み、大人にも安らぎを与えてくれます。消費生活問題を学んで30年、これからは環境問題の一環として関わっていきたく願っています。

会員紹介原稿募集

写真 氏名

or
似顔絵 郵便番号
住所
連絡先
電話番号
Fax

新しい会員の方から順にご紹介していきます。写真や似顔絵とご連絡先をお願いします。

EVENT & BOOKS

イベント情報

1 第2回佐渡島海洋・海岸体験学習研修会

日時 ● 1996年6月15日(土)～16日(日)
 場所 ● 佐渡郡小木町
 内容 ● 体験的「化」・「ガ」化「カ」・磯釣り・船釣り・たらい舟・定置網見学・歴史探訪・自然探訪/主催者：長野県水辺環境保全研究会 (0262-28-5982)

2 新栗ノ木川ウォッチング

日時 ● 1996年6月23日(日) 午前9時出発
 集合場所 ● 新潟市東地区総合庁舎前
 内容 ● 1.山本橋(本馬越)から山ノ下開門で通船川に合流する新栗ノ木川の水生物の調査と今後の課題 2.共通する新潟県宇都宮市の釜川の例 3.会費500円(資料昼食費) 主催：通船川ウォッチング (025-241-4119)

3 第2回スクーパー化「ンガ」・ライセンス取得講座

日時 ● 1996年6月28日(金)～7月1日(月)
 場所 ● 佐渡郡小木町
 内容 ● オブザーヴァー(Cカード)・ライセンス「ハ」・「ス」・「ン」・「ガ」取得講座/主催者：長野県水辺環境保全研究会 (0262-28-5982)

4 「信濃川ふれあい見学会」屋形舟に乗って信濃川と街並を眺めてみよう!

日時 ● 7月7日(日)7月14日・8月6日(日)7月19日・9月5日(日)8月23日
 場所 ● 万代橋下流船着場 午後1:00
 内容 ● 万代橋から酒屋までの約3時間コース 保険料は自己負担です(500円) 主催者：建設省信濃川下流工事事務所 (025-382-5835)

5 横田切れ100周年事業

日時 ● 1996年7月22日(月)
 場所 ● 分水町文化センター
 内容 ● 記念講演会・午前11時/河川・分水越シンポジウム・午後1時30分/記念式典/基調講演「分水」/主催者：横田切れ100周年事業実行委員会 (025-228-1000 内線2927)

6 福島潟サミット「潟に遊ぶ」

日時 ● 1996年8月14日(水)
 場所 ● 豊栄市福島潟 午前9:00
 内容 ● 潟観察会・熱気球・ヨシ迷路・木舟レース・木舟漕ぎ体験など夏の一時、潟を思う存分楽しんでもらいます。主催者：豊栄市(文化振興課文化振興室)(025-367-1491)

書籍情報

1 「みんなでつくるピオトープ入門」



著者 ● 杉山 恵一(監修)
 出版社 ● 合同出版(定価1600円)
 内容 ● こんな話も載っています。休耕田をトンボの公園に・町おこしにトンボは役立っていますか?・校庭の果樹を給食のデザートに・木炭浄化施設とホテルの関係・近自然工法/多自然工法とはどんなものか?

編集後記

通船川の報告書がひとまずまとまった。北陸建設弘済会の研究助成事業にお応えできたのがうれしい。最後に延べ10人がかりで仕上げた。200以上ページにもなり会員の皆さん全員にはお配りできないので、東地区公民館などで閲覧していただけます。すみません。

毎回ウォッチングを開催する度に参加者の輪が広がり、市民運動の意義と盛り上がりを感じたネットワークだった。と、こう書くと終わったように思われるかも知れない。いえいえ、このネットワークはまだまだ続きます。通船川が市民の声で改修され、川らしい川として復活するまでは。都市河川は面白いテーマです。
 編集鳥(長) 高橋正良

『新潟の水辺を考える会』ご案内

この会は、遊び半分・真面目半分で活動しています。
 ウォッチングには、家族ぐるみで子供達も一緒に参加したりしています。
 自分の足で水辺を歩くなりして、自分でも感じたことから、自分の水辺を発見していく、あるいは考えていくことを大切にしています。
 今までとは違った視点から、あらためて自分の身の回りに目を向けて見ると、同じものを見ているのに今までとは違うものに見えてきます。新しい発見があります。

自分の世界もまた少し広がってきます。

この会も色々な分野の人達が集まって、それぞれの世界がもっと広がっていくような出会いの場を提供できる会にしたいと考えています。あなたの参加お待ちしております。
設立年 1987年10月1日 目的 水辺に関わる自然、歴史、文化、生活、風俗、スポーツ、レクリエーション並びに科学技術を探り、これからの水辺の望ましい姿を考え、地域の生活向上に寄与することを目的とする。 代表者 会長 大熊 孝(新潟大学工学部教授) 会員数 個人118名 法人9団体 活動①水辺シンポジウムの開催②水辺ウォッチング③会報「新潟の水辺だより」④水辺環境整備に関する学習会⑤長野県富山県の水辺グループとの交流会 年会費 個人会員2,000円 賛助会員(法人など)10,000円

入会申込書

年 月 日

フリガナ氏名	年 齢	職 業
	男・女	
住 所 電話番号	〒	〒
	勤 務 先 住 所	
	☎ () -	☎ () -

●事務局 〒950 新潟市大学南1丁目7821-5 (株)グリーンシグマ内 Phone 025-263-2733 Fax 025-263-1134
 ●編集 〒950 新潟市河渡2-2-8 (株)サザンウインド内 Phone 025-271-7515 Fax 025-271-1884